

令和3年度 行政対応特別研究評価報告書

<p>課 題 名</p>	<p>持続的な畜産物生産に向けた堆肥の広域流通や有機畜産等に関する研究</p>
<p>研究実施期間</p>	<p>令和3年度</p>
<p>政策研究の概要</p>	<p>「みどりの食料システム戦略」においては、食料の安定供給・農林水産業の持続的発展と地球環境の両立、SDGsへの対応が求められており、今後の畜産・酪農生産においては地球温暖化を始めとした環境問題への対応も重要な課題となる。畜産で発生する家畜排せつ物の発生量は都道府県間で大きな差があり、畜産由来の堆肥の供給量に過剰感がある地域と不足している地域が併存するが、国内における堆肥の広域流通は十分進んでおらず、畜産、耕種双方からの課題解決に向けて必要な施策の検討が求められている。また、欧米を中心に、持続可能な生産方式として有機畜産が注目され、有機畜産を行う経営体も増加しているが、我が国においては、有機畜産は浸透していないことから、持続的な畜産物生産を推進していく観点からも有機畜産に対する理解醸成を図る必要がある。</p> <p>そのため本課題では、1) EUにおける堆肥の広域流通、2) 有機畜産及び持続的畜産という2つのテーマに関して情報収集に取り組んだ。</p>
<p>評価結果</p> <p>○評価委員会名及び開催日 「肥料表示の適正化等に関する規制・制度の遵守強化における社会科学手法の導入に関する研究」 令和4年3月18日（金）</p> <p>○評価委員名 安藤光義 委員 （東京大学大学院農学生命科学研究科教授） 川手督也 委員 （日本大学生物資源科学部教授） 茂野隆一 委員 （筑波大学生命環境系教授）</p>	<p>【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。</p> <p>○社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある（1） A:大きな意義がある（1） B:意義がある（1）</p> <p>○政策の企画・立案への貢献 A:大きな貢献が見込める（2） B:貢献が見込める（1）</p> <p>○学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる（1） B:学術的に評価できる（2）</p> <p>○研究計画・研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である（3）</p> <p>○研究目標の達成度 A:達成度は高い（2） B:概ね達成している（1）</p>

**○評価基準**

・社会的ニーズへの対応

S:非常に大きな意義がある

A:大きな意義がある

B:意義がある

C:意義が小さい

D:意義は見出しがたい

・政策の企画・立案への貢献

S:非常に大きな貢献が見込める

A:大きな貢献が見込める

B:貢献が見込める

C:貢献は小さい

D:貢献は見込みがたい

・学術面からみた研究成果の評価

S:学術的に非常に高く評価できる

A:学術的に高く評価できる

B:学術的に評価できる

C:学術的な評価はやや低い

D:学術的な評価は低い

・研究計画の妥当性

S:非常に良い

A:妥当である

B:概ね妥当である

C:やや妥当でない

D:妥当ではない

・研究資源・実施体制の妥当性

S:非常に良い

A:妥当である

B:概ね妥当である

C:やや妥当でない

D:妥当ではない

・研究目標の達成度（達成可能性）

**【総合評価】**（ ）内は3名の委員の投票数を示す。

2:目標を達成した（3）

**【評価委員からの主な意見】**

○堆肥の品質の均質性の確保、統一性の実現はその広域流通にとって重要なポイントだと考えます。オランダの事例でそれがどのように達成されているのかを調べてみてはどうでしょうか。また、国内での堆肥生産の状況を、そうした視点から調査をしてみてもいいかと思いました。

○霜降り肉信仰による現在の肉質格付けに基づくブランドのあり方が変化している可能性があり（赤肉志向の高まり）、銘柄牛肉ハンドブックを使った牛肉ブランドの現状の分析をしてみてもいいでしょうか。

○2020年センサスを使った有機農業と畜産経営との関係の詳細な分析をしてみてもいいでしょうか。政策研にはセンサス分析の専門家の方がたくさんいらっしゃいますので結果は出ると思います。

○コロナ禍の中にもかかわらず、社会的ニーズの高い持続的畜産をテーマとして社会科学的分析に取り組み、次につながるよう研究を進めつつ、研究成果を一定とりまとめている点は高く評価できる。

○堆肥についてのオランダ、フランス、デンマークについてのとりまとめは、政策面のもならず研究面でも優れたものになっている。「広域流通」という観点をはずして良いので、堆肥利用と流通に関する三か国の国際比較ということで農林水産政策研究などにとりまとめて成果を公表していただきたい。

○EUにおける堆肥の広域流通について組織的に取り組んだ研究はほとんど存在しないため、貴重な研究成果であると考えます。堆肥という切り口からEU各国の畜産を観察することにより、日本の畜産、耕畜連携のあり方や特殊性がある程度浮き彫りになったように思う。

○この研究をきっかけに、政策研における畜産の研究体制を強化して欲しい。研究ニーズが大きいにもかかわらず畜産経済・経営の専門家は非常に少ない状況である。専門性の高い分野であることから大学での研究者養成は難しいため、政策研のような組織がそれに取り組むことは社会的な意義が大きいと感じる。

<p>S:達成度は非常に高い  A:達成度は高い  B:概ね達成している  C:達成度はやや低い  D:達成度は低い</p> <p>・総合評価</p> <p>1:目標を上回った  2:目標を達成した  3:目標を下回った  4:目標を大きく下回った</p>	
<p>今後の対応方針</p>	<p>政策研における畜産分野の研究は今年度開始したばかりであり、令和4年度以降も引き続き行政部局とも連携し、国内畜産業の環境配慮及び持続可能性等に関する研究を継続していく予定である。特に令和4年度は今年度得られた成果及び評価委員からいただいたご指摘を踏まえ、持続的な畜産の全体像を把握すべく、より具体的な研究課題に取り組む予定である。</p>